

「自分たちの町は自分たちで守る」 真野地区まちづくり推進会の実践に学ぶ

▼問合せ 危機管理グループ ☎079(435)0991



▶平成25年度播磨町防災展入賞作品
最優秀賞
乾博貴くん(播磨南中学校3年)

平成23年3月に発生した東日本大震災は、伊勢湾台風以来、現代社会が初めて経験するスーパー広域災害といわれていますが、南海トラフ地震が発生した場合は、これをはるかに上回る被災規模になることが想定されています。また、近年頻発する局所的な大雨や大型化する台風に伴う風水害も大きな脅威となっています。

防災に限らず、安全・安心のまちづくりを実現するためには、普段から地域と行政の連携をもって課題に取り組むことが重要です。

このような背景のもと、今年度で4回目となる播磨町自主防災組織合同研修会は、長年にわたり「協働によるまちづくり」を進めてきた「真野地区まちづくり推進会(神戸市長田区)」から清水光久さんを招き、これまでのまちづくりの取り組みについて講演をいただきました。



いつか必ず発生する災害に備えるためにも、普段からどのような地域づくりを進める必要があるのかについて、住民の皆さまと情報を共有するため、また、防災・減災は地域に住む多くの人が共通の認識をもって取り組むことが大切との考えから、ここに、研修会の内容を抜粋して皆さまにお伝えします。

プロフィール
講師 清水光久さん
(真野地区まちづくり推進会)

清水さんは、神戸市長田区の南部に位置する真野地区で、まちづくり運動に取り組んでい

ます。
「真野地区まちづくり推進会」は昭和55年11月に発足し、昭和57年5月に「まちづくり協議会」として神戸市より認定を受けました。昭和57年10月には「真野地区まちづくり協定」を神戸市長と締結しています。活動の歴史は古く、公害対策などの取り組みが昭和40年ごろから開始されています。

※1「神戸市地区計画及びまちづくり協定等に関する条例(まちづくり条例)」に基づき、地区の住み良いまちづくりを推進することを目的として住民などが設置し、神戸市の認定を受けた協議会。

※2まちづくり条例に基づき、まちづくり協議会が、まちの将来像や方針などをまとめ、そのうち特にルールとして決めておくことが必要な事項について神戸市長との間で結ぶもの。この協定が締結されると、住民などと神戸市が協力してその内容を守っていくことになる。

はじめて

私は皆さんと同じように普段は地域でボランティアをしている一住民です。専門家のような話ではできませんが、阪神淡路大震災から、私たちの町がどう復興したかというお話をしたいと思います。

真野地区 まちづくり運動の原点

1965年代初頭、公害反対運動から端を発した住民運動は、公園づくりや緑化推進、児童の健全育成、障がい者問題など精力的に取り組んでいます。とりわけ、1970年前

後からひとり暮らし老人、ねたきり老人に対する住民ボランティアによる友愛訪問、入浴サービス、給食サービスなど行政に先駆けて取り組んだのは画期的なことでした。
1980年、本格的なハードのまちづくり(修復型再開発)に取り組み、20年先の将来構想を住民に提案(住民主体、行政参加)。30年をかけた、できることからゆっくりとまちの再開発をすすめてきました。

阪神淡路大震災

「まちづくり20年構想」を推進していた15年目に阪神・淡路大震災が発生しました。その中で真野地区が

やってきたことは、「自分たちの町は自分たちで守る」、あるいは「自分たちの町は自分たちでつくる」ということ。

長田区の被害は全壊率も高く、全壊全焼合わせて5割が被害にありました。2人に1人が避難という状況にあり、地域の団体・組織の半分が機能しなくなっていました。

組織としての支援活動

地震発生後3日目に、避難所を運営するための本部を立ち上げました。場所は学校の職員室を借用し、1月から1カ月間毎日、短時間ですが本部会議を開催しました。地域、学校、

行政が協力しながら避難所運営にあたりました。
避難所を運営するための本部はいろいろな形態があり、学校や行政が主体となって運営している場合もあれば、真野地区のように住民が主体になって運営する場合もあります。いずれにせよ、避難所が開設された場合は、素早く本部を置かなければならないのです。

例えば、ボランティアによる支援は組織的に受け入れなければ有効に機能しません。その点からも早く本部を設置することが重要となります。組織的に対応できなかったところは、うまく受け入れることができず、残



▶平成25年度播磨町防災展入賞作品
優秀賞
政岡蓮くん(播磨西小学校5年)

真野地区のまちづくりの実績

1965~1975年 真野地区まちづくり運動

- 公害追放運動
公害のデパート。小学生児童の4割にぜんそく症状。住民大会で公害工場と交渉。一地域から全市の公害防止協定に波及。
- 環境改善への取り組み
道路や側溝の掃除。幹線道路沿いに花壇づくり。各家庭での一鉢運動。公害工場跡地に公園づくり。工場や駐車場周辺の植栽づくり。

1965~1980年 まちづくり運動のひろがり

- 子どもを守る運動
子ども会と母親クラブの結成。かぎっ子教室の開催。丸山地区との交流。
- まちづくり学校「公害と市民」など
- 公園管理会~お年寄りの生きがい
- 真野校区緑化推進協議会(建設省)の運動

1970年~ 地域福祉(老人福祉)活動への展開

孤独死をなくす(安否確認のシステム)。入浴サービス(第3回まちづくり学校から)。給食サービス(ねたきり老人をつくらない運動)。

1970年~ 本格的なハード(都市改造)のまちづくりの取り組み

まちづくり懇談会。まちづくり検討会議。真野まちづくり20年構想提案、まちづくり推進会発足。真野同志会発足。神戸市まちづくり条例制定。

1980年~ まちづくり推進会の発足以後次々と神戸市の支援を受けながら各種事業を実施

真野まちづくりフェスティバル。

真野地区での 暴力団組事務所追放運動

2006年1月に暴力団組事務所が真野地区の一角に造られようとし、兵庫県警から住民の力で暴力団を追い出してくれないかと要請がありました。

真野地区は、公害追放運動やまちづくり20年構想、阪神・淡路大震災の復興と取り組んできたため、地域の結束が強く、暴力団組事務所追放運動は2,000世帯の住民が立ち上がり、真野地区から暴力団組事務所を追放することができたのです。

この運動を通じて、次にどういふ災害がこようが、少々のことであっても真野地区の住民は頑張ってくれると確信を持つに至りました。

団塊の世代への期待 ～これからの地域力～

私は、サラリーマンです。勤めをしながら、ボランティアをしています。皆さんの中には、会社を退職されてここに参加されている方もおられるかと思ひます。

団塊の世代と言われた人の退職が増え、全国的に行政はこの団塊の世代に期待しています。地域のボランティアに参加してほしいと願っているということですね。

高齢化が進むということはマイナス要因ではありますが、とりわけ団塊の世代は、いろんなノウハウを持っています。ありとあらゆる職業を経験された人が地域にいるのですが、それらの人が次々と退職をして町に戻ってくるのです。ぜひ、そういう人にも加わってもらって、一緒になってこれからのまちづくり、あるいは防災対策にかかわっていただけたら、非常に大きな力を発揮するのではないかと思います。



組織としての復興

真野地区では43戸が焼失した場所に、いち早く民間で住宅を建ててもらうことができました。

被災者を地区外に出すまいとして、まちづくり20年構想の推進により9つに増えていた公園の広場に、真野地区独自の仮設住宅が105戸建設されました。また、地域の中心にはコミュニティセンターのための用地がありました。また、そこに地域の住民が管理する福祉センターが建設されました。

この福祉センターは、高齢者のデイケアスペース、入浴サービスや給食サービスができるスペース、あるいは児童館、高齢者住宅などの機能

も備えており、高齢者から孫まで三代が活動できる施設となりました。

また、町の発展のため、嘆願書・署名を集めて神戸市営地下鉄の駅も誘致しています。

地元の企業も復興に協力し、真野地区に本社を戻し、いくつものイベントを作り出しています。例えば、新小学1年生を祝うイベントやクリスマスパーティー、七夕祭りを行っています。七夕祭りは、地下鉄に乗って5千人を超える方々が参加する、大きなイベントになっています。

このようなイベントは、「企業と住民が一緒に取り組まなければ地域の活性はないのだ」という精神を企業が持っているからこそ実施できて

まとめ

今後、南海トラフ地震やそれに伴う津波の心配があり、また、犯罪、青少年問題、子どもの健全育成をどうするかという、様々な問題があります。これらの問題に対応するために、住民としてどれだけ地域力を高めるかということが最も重要です。

真野地区では40年かけて自らの地域に自信を持ったわけですが、どの町でも普段から町内会とかいろいろな組織をつくり、地域のコミュニケーションを高める必要があると思います。

いざというときに住民と一緒に立



ち上げられるような地域を、そのよう
なコミュニティをそれぞれの町がつ
くることが災害に強い町になる
のではないのでしょうか。



▲平成25年度播磨町防災展入賞作品
優秀賞
田中 直輝くん(播磨南中学校3年)

念ながらボランティアが帰ってしまつたという例もあります。

次に問題となったのは食料の確保でした。そこで、普段から地域のイベントで使用している大きな釜で米を炊き、おにぎりを作って配布しました。

また、物資については、他の地域では避難者が役所に直接取りに行きましたが、そのような状態になると、力のある人が物資を確保してしまい、高齢の方などは物資が配分されなくなってしまう。

真野地区では、本部から行政に対して、食料や物資を避難所まで持ってきてほしいと組織として要請し、配布は地域のボランティアで担いました。ライフラインが止まっていたため避難所にいる避難者だけでなく、自宅避難している高齢者など全世界に公平に行きわたるように実施し

ました。

家屋の被害調査については、行政が行う被害調査とは別に、遠方の建築士を呼び、独自に実施しました。調査だけでなく全壊や半壊の家を、京都から工務店に来てもらい、修理を行っていました。

また、若者は「建物レスキュー隊」を組織し、被災者から要請があると、屋根にブルーシートを張って応急処置を行ったり、家の中の片づけを行ったりと、避難者が早く自宅に戻るよう支援をしていました。

また、被災者を励ますため、4月にはこれまで長く続けてきた花見を開催。炊き出しも行い、被災者も楽しむことができました。ねたきりの高齢者の方でも車いすで参加して一緒に楽しくやろうというのが発端で、このイベントも既に30数年続いています。

阪神淡路大震災後の真野地区の様子

地震とその後の大火災がもたらした厳しい状況

- 地震直後の消火活動
消防車が来ない中、地域住民のバケツリレーや、企業の自衛消防団の協力で、43戸で火災を消し止めた。(2千700戸ほどの地区)
- 仮設住宅の建設と人口流出
仮設住宅建設後、遠方の仮設住宅に入った人が、必ず真野地区に戻るというわけではなく、その仮設住宅の近くにできた復興住宅に入居。生まれ育った長田へ帰ることなく、亡くなっていくという状況が生まれきた。
- 活気が戻らない
震災からもうすぐ20年。いまだに長田地区にはシャッター街がある。どんどん住宅ができて、住宅に困った高齢者が主体に入居するために購買力が上がらない。店が開いてもすぐ閉まる。このため、町の活気が戻らず、人口も戻らない。

過酷な避難所生活

- 企業も体育館を解放
地震発生直後から、家を失った、あるいは家が怖くて住めない地域住民が、学校の教室に逃げ込んだ。地元企業も自社の体育館を解放してくれ、その中に避難した。
- 体育館での不自由
1月17日という寒い時期、避難所といっても冷暖房がなく、長期間暮らせる場所ではなかったが、毛布に包まって避難した。
体育館は間仕切りもなく、このような場所では生活しにくい方々が出てきました。例えば震災直後といえども勤め先へ出勤しなければならぬ方は、早く起床するため、他の寝ている方の邪魔になります。あるいは高齢者は、トイレに間に合わないのではないかと心配があり、そのような方々は公園にレジャー用のテントを張り、避難所が解消される8月まで生活しており、過酷な住環境だった。
- 井戸の活用
震災後一番困ったのは、飲料水や生活水といった水の確保だった。下水道が止まっているため、トイレ用の水を確保するため、地震の翌日から井戸の出るところに行列ができました。
この時に、普段から井戸を掘り、使用していたゴム会社や、寿司屋、銭湯など様々なところが井戸を解放し、住民はそれを使用した。3日後くらいからは自衛隊による給水が始まり、学校が休みになっていた小学生たちが住民たちに水を配っていた。

質疑応答
1

質問① 地域「コミュニティ」形成のロジックは？

真野地区では、最初が公害に対する取り組みというところでお聞きしたが、その後どういふふうか継続的な「コミュニティ」を形成につなげていったのか教えていただきたい。

答え① 楽しいことをいっばいすることが大切

真野地区には、イベントを実施する母体として「真野同志会」という組織があり、年間を通じて10以上の地域イベントを催しています。40年前に「まちづくり20年構想」をやるうとしたときに、当時の中心は自治会長で60代や70代の住民でした。でも、20年の構想であるため、当時の40代や50代の住民がどうするかということが問われて結成した組織です。

この組織は、すくにはまちづくり活動には取り組まず、まず町のいろんなイベントの下支えをしました。たとえば盆踊りだったりやべら組んだり、テントを張ったり、店も出すという活動を行います。

真野同志会は、50歳が定年です。定年後は自治会長を引き受けたり、まちづくりの役員を担ったりします。現在、真野地区には16人の自治会長がおりますが、全員同志会の出身です。イベントの楽しみを知っているから、自治会長になり、まちづくり

やっても同じように堅苦しくなくて、和やかに行えます。

また、突然来た災害に対しても、そういうメンバーが中心になって頑張れるのかなと思っています。



質疑応答
2

質問② 自主防災組織のメンバー構成と活動の実態について

今、地域では自主防災組織の組織編成をやるうとしているが、地域には消防職員、警察官、公務員、看護師など様々な職業の人がいて、そういった人は、災害が発生すると勤務先に招集されることになりま。残された自主防災組織のメンバーは、女性や高齢者が中心になるため、いざ災害が起きた時に自主防災組織が機能できるかということが非常に危惧しています。

自主防災組織の編成について、災害時に機能するような方法としてどのようなものがあるのか、真野地区の中であれば教えていただきたい。

答え② 地域の「コミュニティ力」と普段からの備えをもとに、「いる人・あるもの」を有効活用する

行政からは、自主防災組織の活動を何とか頑張ってもらいたいという要請がありますが、非常に難しいですね。真野地区の自主防災組織も組織力が弱っているのが現状です。

しかし、それはそれほど問題ではないと思っています。

阪神・淡路大震災の時には、まだ自主防災組織はなかったのですが、消火活動や避難所運営という大変な状況になれば、地域の中から担ぎ出されてリーダーになる方が現れるものです。

救出活動でも、普段いないと思っただ若者が、誰の指示によるでもなく一斉に倒壊した建物に救出に行きました。近くの工務会社の重機を使っ

て、救助するということをやりました。

かといって、防災訓練は不要かといえはそうではなく、防災訓練をしておけば、災害に及んでやるべきことやその方法が身につきます。いざというときには、日ごろ培った成果をベースに臨機応変に対応することも可能だと思います。



質疑応答
3

質問③ 大規模災害時の自主防災組織の活動を知りたい

阪神・淡路大震災、東日本大震災、伊豆大島の災害など、大きな災害においても消防、警察、住民、行政の動きは目に見えるが、地元の自主防災組織の動きはあまり目に見えない。実際に必要な状況になるのか教えていただきたい。

答え③ 3日間頑張る地域の力

真野地区には、災害時要援護者対策先進地として研修にいられています。真野地区では個人情報保護の点から、なかなか地域で災害時要援護者の情報を把握できなかったのですが、該当者に手を挙げてもらって30数十人の災害時要援護者が見つかりました。この方々について、災害が起これば誰が誰を支援するということまで決めてあります。

しかし、今、論議しているのは、津波が発生したとしたり救出する時間があるのか、という点や、自宅が倒壊して大変なのに決められた人を助けに行けるのか、という点です。

これが現実的な話で、行政にしても、消防職員にしても、被災地では被災者です。だから自分の家族を放り出して救出に行けというのは無理だと思っています。

そこで行政は、3日間は住民で頑張ってもらいたいと言わざるを得なかつ

たのです。

3日間は地域で頑張り、それから自衛隊や公の手が入るといふことを言わざるを得なかったわけですから、自主防災組織を活用し、「いる人・あるもの」も活用しながら、その3日間をどう頑張るかということにかかってくると思うのです。

災害が発生し、家屋が倒壊する、被害が発生しているというときに、自治会や自主防災組織の役員であるうがなろうが、住民一人ひとりが対応できるような体制を作るのがコミュニティではないかと思えます。したがって、普段からのコミュニティづくりがしっかりと取り組み、同時に行政から提供されるハザードマップやマニュアルなどを普段から身に付けておき、地域の防災対策を進めていってはどうでしょうか。

もしもに備えて
上手に備蓄

備蓄食品は最低3日分、1週間分の備えがあれば安心とされています。日頃から長期保存可能な食品(缶詰・レトルト・インスタント麺・米・乾物など)を買置きし、非常時の食の備えに役立てましょう。

買置きした食品は賞味期限をチェックし、日頃の食生活で期限の古いものから利用し、なくなったら買い足すことを繰り返し、上手に食糧の備蓄をしましょう。



備蓄品を使ったレシピ ツナとトマトのリゾット(材料)2人分

<作り方>

- ①ツナ缶の油とツナを分けておく
 - ②玉ねぎはみじん切りにする
 - ③鍋に①のツナ缶の油、②の玉ねぎを入れて中火にかけ、玉ねぎがしんなりするまで炒める
 - ④トマトジュース、水、固形コンソメ、レトルトご飯、①のツナを加えて、弱めの中火で7~8分程度煮る(途中焦げないように何度か混ぜる)
 - ⑤ケチャップ、塩、こしょうを加え、ひと混ぜして火を止める
- ☆マッシュルーム缶、ミックスピーズ缶などをプラスすると食物繊維もアップします。

- ツナ缶(油漬け)..... 小1缶
- 玉ねぎ..... 1/2個
- トマトジュース缶..... (190ml入) 1缶
- 水..... 200cc
- 固形コンソメ..... 1/2個
- レトルトご飯..... (200g入) 1パック
- ケチャップ..... 大さじ1
- 塩・こしょう..... 少々



ふるさとの文化財を守る 阿閑神社で防火訓練を実施

1月26日の「文化財防火デー」にあわせ、県の重要文化財に指定されている阿閑神社本殿を火災から守るための防火訓練を実施しました。

地元住民や消防団による通報と初期消火、ご神体や重要文書などの持ち出しと住民の避難訓練、加古川市東消防署播磨分署による放水などの訓練を行い、いざというときにそなえた確認をしました。

▶文化財保護の問合せ 郷土資料館
☎079(435)5000



防犯・交通パトロール実施中

子どもたちを不審者から守るために、加古川市と警察OBの方のご協力のもと、防犯・交通パトロール活動を行っています。町内の巡回は毎週2回で、下校時から夕暮時にかけて通学路を中心に巡回しています。スピーカーで交通安全などを呼びかけながら、不審者の出没情報などにも迅速に対応しています。

「安心安全のまちづくり」のために、今日もパトロールを行っています。

▶問合せ 危機管理グループ
☎079(435)0991



加古川市消防本部からのお知らせです PA連携(消防隊による救急活動支援)をはじめます!

▼問合せ 加古川市消防本部警防課 ☎079(427)6539

加古川市消防本部では、4月1日から状況により救急現場にAED(自動体外式除細動器)などの応急処置用の資器材を積載した消防隊が同時に出勤し、救急隊と相互に連携して救急活動や人命救助活動などを行う「PA連携」をはじめます。

PA連携とは...

救急現場において消防隊と救急隊が連携して救急活動などを行うことです。

※「PA」とは、消防車(Pumper)と救急車(Ambulance)の双方の頭文字から「PA」と名前をつけたもので、全国の消防本部において広く使用されている用語です。

消防車がPA連携で出勤するのはどんな場合です

- ①通報状況から、心肺停止状態の傷病者が発生したと疑われる場合
- ②交通量の多い場所などで、

- 傷病者や救急隊の安全を確保できない場合
- ③救急隊だけでは、傷病者の搬出が困難な場合
- ④このほか、事故の状況からPA連携による出勤が必要な場合

消防車のサイレンの音の違い

火災の場合とPA連携の場合のサイレン音は区別しており、火災の場合は「ウーウーカンカン」というサイレン音と鐘の併用、PA連携の場合は「ウーウーウー」というサイレン音のみとなっています。

皆さまの願い

「救急車を呼んだのに、消防車がサイレンを鳴らして来た」と、驚かれることもあるかも知れませんが、1人でも多くの人命を救うことを目的としておりますので、皆さまのご理解とご協力をお願いします。



していただきます。

播磨町消防団 団員募集中

消防団員のやりがいは、地域に暮らす自分自身が、地域のために働き、身近な人の役に立てること。そして、年齢も職業も様々な仲間と出会い、人としても大きく成長していけることにあります。

播磨町の消防団員は、現在358人(内女性団員20人)で、火災発生時の消火活動、地震や風水害の災害発生時の救助・救出活動などに従事し、地域住民の生命・財産を守るために活躍しています。

また、災害発生時だけでなく、平常時においても訓練・防災・防火に対する啓発活動を行い、防災力の向上に貢献

していただきます。

播磨町消防団では、このよ

うな地域安全の「縁の下の力持ち」としての消防団員を募集しています。年齢が18歳以上50歳未満で、町内に居住している方であれば入団できます。あなたも、地域のために一緒にがんばりませんか。

▼問合せ 危機管理グループ ☎079(435)0991

春季火災予防運動

3月1日(土)～7日(金)

全国統一防火標語「消すまで心の警報ONのまま」

春先は季節風が強く、空気も乾燥し、火災の起こりやすい状態が続きます。火の使用には、十分ご注意ください。

▼問合せ 加古川市消防本部

予防課 ☎079(427)6532

消防車による「火災予防啓発パレード」を実施します

播磨町消防団は、春季全国火災予防運動に合わせて3月2日(日)午前9時45分から全ての消防車が隊列を組んで町内をパレードする「火災予防啓発パレード」を実施します。

▼問合せ 危機管理グループ ☎079(435)0991

加古川市防災センター

普通救命講習会

固定や止血などの応急手当、AEDを使用した心肺蘇生法の講習会です。

▼日時 3月22日(土)

気象のおはなし

なたね 春一番と菜種梅雨



3月に入ると暖かい日もできますね。中でも特に、強い風が吹いて突然気温が上がることを「春一番」と呼びます。しかしこれは、低気圧が日本海を発達しながら北上する時に吹くので、吹いた直後にまた、いわゆる「寒の戻り」があったりします。春一番が吹いたと聞くと、本格的な春が訪れたかのような印象を与えがちですが、実は全くそうではなく、むしろ逆に寒さ対策をしなければいけないほどなので、みなさまも心のご準備をしておいてくださいね。

また、この時に通過する低気圧が強いフェーン現象を引き起こし、大きな火災を発生させることもありますので、引き続き火の元にはご注意くださいませ。

これとは別に、3月の特徴的な天気「菜種梅雨」というのがあります。菜の花が盛りを迎える頃に、しとしと雨の降る日が続くことを言います。この雨は4月まで続くこともあり、桜の季節と重なって、花を散らす雨になることもあります。

このように、春から夏に変わる「梅雨」だけでなく、こうして季節の変わり目には雨の降る日が続きます。ちなみに夏から秋に変わる時の雨は、「秋霖」と呼ばれています。

文責/気象予報士 吉田純代